

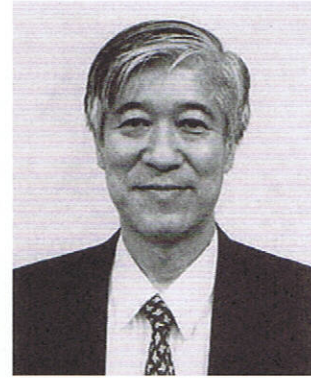
急がず、あせらず、油断せず

科学技術の展開は年々加速されていると言われている。実際、研究科長に選ばれてしばらく論文のサーベイをさぼっていると、自分の専門分野でどんな話題が議論の焦点となっているか、世界のどこにどんな人がいるか、などがわからなくなってしまう。

とは言っても、先方はこちらの事情を御存知ないので、しばしば査読を依頼されることがある。大方は「公務多忙にて申し訳ございません」と御断りしているが、色々な事情で引き受けざるを得ないこともある。そういうときは、まず、いくつかの主要国際会議で関連論文を探しておいてから送られてきた論文の Reference List をみる（これを逆にすると危険だと思っているが）。これでなんとか凌いでいるということは、少なくとも私が深く関わっているシステム制御分野について、学問の方向性に影響を与えるような本質的進展は、最短10年程度の間隔でしか生じていないということであろう。

これは、理論中心でしかも工学志向の分野に限ることかも知れないが、1つの新しい考え方（パラダイムと呼ぶ人もいる）の良い面・悪い面・足りないところが洗い出されていく過程で一段上の視野が得られる。そのためには、当該テーマにかかわる人々が色々な立場から議論と交流を積み重ねる必要がある、ということであろう。

本財団では、若手の研究者を重視して助成を行っておられる。若い研究者の中には、毎年たくさんの論文が発表されるのに圧倒されて、自分がやれることがもうすぐなくなってしまうのではないかと、口に出して心配する人も多い。しかし、決してそんな心配をしなくてよいことは歴史が証明している。急がぬよう、あせらぬよう、ただし、最新の研究動向には目を配りながらじっくりと自分のテーマにとり組んでいただきたい。



評議員 荒木光彦

（京都大学大学院工学研究科長・工学部長）